小学校高学年の体育授業におけるゴール型教材に関する研究
－運動有能感と状況判断力との関係性に着目して－

野村 加那　（和歌山大学）

１．目的

本研究では、小学校５年生を対象に児童の内発的動機付けを高めることに留意しながら、アウトナンバーゲームをタスクゲームに取り入れたセストボールの授業(計８時間)を計画・実施し、児童の運動有能感と状況判断力それぞれの変容と相互関係について明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

(1)対象者：小学校５年生１クラス 29 名

(2)分析方法：運動有能感については、単元前後に実施した運動有能感調査の結果について比較分析した。状況判断力については、単元前後に実施したメインゲームの映像から GPAI を用いて状況判断(プレー)の適切率を比較分析した。

３．結果と考察

(1)運動有能感の分析：t 検定の結果、児童全体の運動有能感３因子の合計、及び「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の各因子すべてにおいて、単元後に有意な向上が見られた。さらに、表１の通り、単元前の運動有能感調査の因子ごとの上位群･下位群での３因子合計と各因子すべてで、有意な単元の主効果がみられた。また、３因子の合計と各因子すべてにおいて､有意な群の主効果、交互作用が見られた。多重比較の結果、下位群の得点の向上が著しく、特に下位群において運動有能感の向上に効果があったことが分かった。

表１　運動有能感における上位群・下位群の変容

	上位群			下位群			二要因分散分析		
		MEAN±SD			MEAN±SD				
	N	単元前	単元後	N	単元前	単元後	単元の主効果	群の主効果	交互作用
全体	14	50.2±0.75	53.8±0.60	13	38.3±0.98	45.2±0.97	＊＊＊	＊	＊
身体的有能さの認知	14	15.4±0.71	16.9±0.54	13	8.5±0.81	11.1±1.00			
統制感	14	18.9±0.43	19.1±0.40	13	13.9±0.95	16.8±0.91	＊＊		＊＊
受容感	17	17.6±0.77	18.8±0.61	10	12.8±0.80	15.6±0.84	＊＊＊		＊

***p＜0.001　**p＜0.01　*p＜0.05

(2)状況判断力の分析：t 検定の結果、児童全体のパス・シュート各々の適切率と全プレー合計の適切率において有意差が見られた。また、表２の通り、単元前の運動有能感調査の因子ごとの上位群･下位群それぞれの状況判断力の変容について、３因子合計と各因子すべてで適切率が向上した。二要因分散分析を行った結果､「身体的有能さの認知」と「統制感」で単元の主効果に有意差が見られたが、その他の因子において有意な単元の主効果、群の主効果、交互作用は見られなかった。

表２　運動有能感おける上位群・下位群での全状況判断の適切率の変容

	上位群			下位群			二要因分散分析		
	N	単元開始前	単元後	N	単元開始前	単元後			
		MEAN±SD			MEAN±SD		単元の主効果	群の主効果	交互作用
運動有能感全体	7	70.8±29.1	89.0±13.4	10	67.0±24.6	78.6±8.6			
身体的有能さの認知	7	74.2±28.1	86.2±14.0	10	62.0±24.3	82.5±10.7	＊		
統制感	7	71.9±29.4	87.9±15.1	10	65.3±23.5	80.1±5.7	＊		
受容感	7	67.4±20.8	87.7±12.2	10	71.8±34.9	80.3±12.5			

*p＜0.05

４．結論

本研究の結果、小学校５年生のセストボールの授業実践において、児童の運動有能感と状況判断力を高められたことが明らかとなった。また、運動有能感と状況判断力の相互関係については、データとして明らかにすることはできなかった。しかし、先行研究(鬼澤、2022)において「身体的有能さの認知」と「統制感」がゲームパフォーマンスを高めることと関連がある可能性が示唆されており、本研究においても、この２因子が高まるほど、状況判断力が高まる可能性が確認できた。

５．主な参考文献

鬼澤陽子(2022)小学校低学年の体育授業における運動有能感を高める指導方略の有効性の検討：運動有能感とゲーム中の状況判断力との関係に着目して,スポーツ教育学研究,42(2):19-31.